法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

万葉類歌比較研究(続)

MAMIYA, Atsushi / 間宮, 厚司

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
54
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
9
(発行年 / Year)
2007-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002934

Hosei University Repository

万葉類歌比較研究（続）

間宮厚司

はじめに

本稿は、小論「万葉類歌比較研究」（『法政大学文学部紀要』五二号、二〇〇六年三月）の続稿である。前稿では三組の万葉類歌を取り上げて検討を加えたが、今回も類歌に関連した考察を引き続き行う。ただし、ここでは近年の注釈書が採用する訓を改めることで、その歌がある歌と類歌の関係になる、というケースを取り上げる。

なお、本文と訓読は、新日本古典文学大系本に原則として従い、原文表記は〈　〉内に示すことにした。

一　一六四七番歌を改訓し類歌に

忌部首黒麻呂（いむべのおびとくろまろ）の雪の歌一首

◎梅の花枝にか散ると見るまでに風に乱れて〈風尓乱而〉雪そ降り来る（万八・一六四七）

この歌は、「梅の枝のあたりに散るかと見るほどに風に吹き乱れて雪が降ってくる」と通釈される。ここで問題としたいのは、第四句の訓み方である。

先に結論を言うと、ここは「風に乱（みだ）れて」ではなく、「風に乱（まが）ひて」と〈乱〉字はマガヒで訓むのがよい。そのことを論証するために万葉歌に見られる動詞マガフと連用名詞形マガヒの全用例を列挙しよう。

A《四段自動詞マガフ［①～③は仮名書きで、④～⑦は〈乱〉字を使用］》

①梅の花散りまがひ〈麻我比〉たる岡びにはうぐひす鳴くも春かたまけて（万五・八三八）

②妹が家（へ）に雪かも降ると見るまでにここだもまがふ〈麻我不〉梅の花かも（万五・八四四）

③……乎布の崎　花散りまがひ〈麻我比〉……（万一七・三九九三）

④秋山に落つるもみち葉（ば）ましくはな散りまがひ〈乱〉そ妹があたり見む　一に云ふ、「散りなまがひ〈乱〉そ」（万二・一三七）

⑤矢釣山（やつりやま）木立（こだち）も見えず降りまがふ〈乱〉雪につどへる朝楽（あした）しも（万

Hosei University Repository

三・二六二）

⑥……下枝に　残れる花は　しましくは　散りなまがひ〈乱〉そ……

（万九・一七四七）

⑦……もみち葉の　散りまがひ〈乱〉たる……（万一三・三三〇三）

B《四段自動詞マガフの連用名詞形マガヒ［⑧⑨は仮名書きで、⑩⑪は〈乱〉字を使用］》

⑧あしひきの山下光るもみち葉の散りのまがひ〈麻河比〉は今日にもあるかも（万一五・三七〇〇）

⑨世の中は数なきものか春花の散りのまがひ〈麻我比〉に死ぬべき思へば（万一七・三九六三）

⑩……もみち葉の　散りのまがひ〈乱〉に……（万二・一三五）

⑪秋萩の散りのまがひ〈乱〉に呼び立てて鳴くなる鹿の声の遙けさ（万八・一五五〇）

右に一覧したA動詞マガフとB連用名詞形マガヒを見れば、マガフは一首の中で、必ず「散る」または「降る」と併用される偏った固定的な表現であった。しかも、マガフの対象は、「花・葉・雪」であることがわかる。したがって、万葉歌におけるマガフは「小さく薄くて軽いものが、次から次へと空中をちらちらと舞う」意を表す。

そうした点を考慮して、次の例はマガフと訓じられているが、これはサワク（騒）の例と考えて除外することにした。

堅香子草の花を攀ぢ折る歌一首

もののふの八十をとめらが汲みまがふ〈挹乱〉寺井の上の堅香子の花（万一九・四一四三）

この歌は大伴家持が越中在任中に詠じた所謂「越中秀吟」（四一三九～四一五〇番歌）と呼ばれる歌群の中の第五首で、家持の代表作として知られ、これまで第三句はクミマガフと訓じられてきた。しかし、このクミマガフは万葉歌に見られるマガフの用法に照らして明らかに異例であり、乙女らが水を汲む姿に対して、マガフという言い方があり得たか、はなはだ疑わしい。

そこで、考察した結果、ここはクミサワクが語義・文字・用法等の点から妥当な訓であるとの結論に達した。この問題については、間宮厚司「家持のクミマガフ改訓」（二〇〇六年度・第五九回万葉学会全国大会要項集）の「発表要旨・資料」（研究発表・一〇月二九日・於日本女子大学）で論じ、別稿を用意している。

ところで、これまでミダルで訓まれてきたものの中に、マガフに改訓すべき例があるので、一首ずつ検討を加えていきたい。

阿保山の桜の花は今日もかも散りまがふ〈散乱〉らむ見る人なしに（万一〇・一八六七）

この歌の第四句は、塙本・全集本・新編全集本以外はチリミダルラムと訓む。しかし、ここは桜の花が散る様子を歌っているのであるから、先ほどの用例を踏まえればマガフの訓がふさわしい。ミダルの語義は、

Hosei University Repository

『時代別国語大辞典・上代編』（三省堂）に「柳・葦・こも・菅・稲・尾・髪・緒・解衣など糸状をなすものについていうことが多い」という解説があるところから、右の歌の場合には不適切な訓となる。

それでは、次の歌はどうであろうか。

川の瀬の激ちを見れば玉かも散りまがひたる〈散乱而在〉川の常かも（万九・一六八五）

この歌の第四句は、いずれの注釈書もミダルで訓じている。歌意は、「川の瀬の激流を見ると玉が散っているのだろうか。それともこの景色は川のいつものことなのだろうか」で、多数の小さい粒状の玉が空中を飛散している様子を歌っている。ならば、対象は「玉」であるが、「花・葉・雪」と同様に捉えることが可能であるから、マガフで訓む条件を満たしているのではないか。

なお、一六八五番歌には「泉河の辺にして間人宿祢の作る歌二首」という題詞があり、次の歌がその第二首である。

彦星のかざしの玉し妻恋に乱れにけらし〈乱祁良志〉この川の瀬に（万九・一六八六）

こちらの歌の場合には「散る」の語もなく、かざしの玉が妻恋のために乱れたので、マガフとは訓めない。それは次の四二四番歌も同じで、恋心や思いの乱れを表しているから、ミダルが適切な訓となる。

こもりくの初瀬娘子が手に巻ける玉は乱れて〈玉者乱而〉ありと言はずやも（万三・四二四）

この歌の場合も「散る」という語が見えないので、「玉は乱れて」で問題ない。新編全集本の頭注には「玉は魂を匂わし、その心が錯乱していることを暗示するか」とある。玉が乱れるという表現は、心が乱れることにつながるのだろう。

以上は問題提起をしたということでとどめ、いよいよ問題の歌の検討に入りたい。

◎梅の花枝にか散ると見るまでに風に乱れて〈風尓乱而〉雪そ降り来る（万八・一六四七）

右の歌の第四句を、諸注はカゼニミダレテと訓む。しかし、この歌も「花…散る」「雪…降る」の文脈の中で使用されている。したがって、「風に乱れて」は「風にまがひて」に改めるのが穏当であろう。この〈風尓乱而〉をカゼニマガヒテと訓むことに関しては、『春日政治著作集・第五冊』（勉誠社）所収「万葉集と古訓点」（一二九頁）にすでに指摘がある。

工藤力男「人麻呂の文字法――みやまもさやにまがへども――」（『文学・季刊』一〇巻四号、一九九九年秋）は、〈乱〉字とマガフ・ミダルの訓に関連して、こう言及する。

Hosei University Repository

「乱」に和訓「まがふ」が見えないのは、平安時代、「乱」には「みだる」の訓が定着していたからであろう。（六〇頁中段より）

「乱　マガフ」は平安時代に受け継がれなかったのである。（六一頁上段より）

そうした中で、平安時代の『古今六帖』に見られる次の「風にまがひて」の句は、いま問題にしている〈風尓乱而〉の訓を考える際に参考となろう。

木の間より風にまがひて降る雪は春来るまでは花かとぞ見る（古今六帖・七〇五）

そうすると、問題の◎と先にマガフのところで一覧した②は、類歌の関係となるので、並べてみたい。

②妹が家へに雪かも降ると見るまでにここだもまがふ〈麻我不〉梅の花かも（万五・八四四）

◎梅の花枝にか散ると見るまでに風にまがひて〈風尓乱而〉雪そ降り来る（万八・一六四七）

②は白梅の花を雪にたとえ、◎は雪を白梅の花にたとえるという違いはあるものの、それぞれの歌に「梅の花・雪降る・見るまでに・まがふ」といった共通の語句が含まれているので、両歌は類歌と認められよう。いやむしろ類歌であるからこそ、あえて花と雪の視点を変えて詠じたと見るべきではないか。

◎と②は、一首の中に「散る・降る」という動詞があるものの、先に一覧した動詞マガフと連用名詞形マガヒを用いた歌が、「散る・降る」と密着した形でもって、次のように複合動詞や助詞「の」を介して連接しているのと相違する。

①散りまがひたる（万五・八三八）
③花散りまがひ（万一七・三九九三）
④な散りまがひ　一に云ふ、「散りなまがひそ」（万二・一三七）
⑤降りまがふ（万三・二六二）
⑥散りなまがひ（万九・一七四七）
⑦散りまがひたる（万一三・三三〇三）
⑧散りのまがひは（万一五・三七〇〇）
⑨散りのまがひに（万一七・三九六三）
⑩散りのまがひに（万二・一三五）
⑪散りのまがひに（万八・一五五〇）

要するに、◎は「風にまがひて」、②も「ここだもまがふ」で直上に「散る・降る」が接していないのである。これは両歌に限って見られる共通点だから、互いに類歌の関係にあると積極的に言ってよかろう。

また、白梅の花が散る様を雪が降る様にたとえた②は、その五首前にある次の歌と見方が類似している。

Hosei University Repository

春の野に霧立ちわたり降る雪と人の見るまで梅の花散る（万五・八三九）

一方◎も、その二首前にある降る雪を散る白梅の花とつい見間違えたと詠じる次の歌と発想を同じくする。

我がやどの冬木の上に降る雪を梅の花かとうち見つるかも（万八・一六四五）

これは想像の域を出ないが、②と◎はその数首前に位置する歌をそれぞれ踏まえたのではないか。踏まえたがゆえに、②と◎は降る雪と散る白梅の花を逆にたとえる結果になったのであろう。

それから、マガフにはこれまで見てきた四段自動詞のほかに、下二段他動詞の例が一首あるので見ておく。

我が岡に盛りに咲ける梅の花残れる雪をまがへ〈乱〉つるかも（万八・一六四〇）

この歌は、「この我が岡に盛んに咲いている梅の花と、消え残った雪を見間違えてしまったことだなぁ」と通釈されるので、下二段他動詞のマガフは、「あるものを別のものと見間違える」意を表している。言うまでもなく、これは「白梅」と「雪」で白いもの同士であるから見分けがたいのである。

そもそもマガフの語源は「目（視線）＋交ふ」と考えられ、そこからマガフの意味の中心は「はっきりと見分けがつかない」というところにある。

二　二三九九番歌を改訓し類歌に

◎あからひく肌も触れずて寝たれども心を異には〈心異〉わが思はなくに〈我不念〉（万一一・二三九九）

この歌は柿本人麻呂歌集に採録されている一首だが、ここでは第四句と第五句の訓読を問題にしたい。まずは、問題の所在を確かめるべく、稲岡耕二『万葉集全注・巻第十一』（有斐閣、一九九八年）の当該歌における【注】（一三八頁）から引用する。

○心を異には我が思はなくに　第四句「心異」は紀・西などの古写本にココロニコトニと訓まれていたが、代匠記（精）にココロヲケニハと改訓。考にココロニケシク、古義には「異心」の誤りとしてケシキココロヲと訓んだ。以後の注釈書にはケシキココロヲ（新考・茂吉評釈）、ココロヲケシク（新訓・全釈・全註釈・窪田評釈・佐佐木評釈・古典大系・講談社文庫）、ココロヲケニハ（私注・注釈・古典文学全集・古典集成・新全集・釈注）というように三通りの訓が見られる。そのうちケシキココロヲは原文「心異」の順序では無

Hosei University Repository

理な訓で従えない。またココロヲケシクは、注釈も指摘するとおりケシクの例を他に見ないから採れない。ココロヲケニハワガオモハナクニが妥当な訓と判断される。古体歌。

第四句の訓み方について筆者の結論を言うならば、右の記述の中で、「ケシキココロヲは原文「心異」の順序では無理な訓で従えない」と否定された『古義』の唱えるケシキココロヲである。以下、そう考える根拠を示そう。

まず、次の三首を見てほしい。

①韓衣裾のうちかへ逢はねども異しき心を〈家思吉己許呂乎〉我が思はなくに〈安我毛波奈久尓〉
或る本の歌に曰く、「韓衣裾のうちかひ逢はなへば寝なへのからに言痛かりつも」といふ。（万一四・三四八二）

②はろはろに思ほゆるかも然れども異しき心を〈異情乎〉我が思はなくに〈安我毛波奈久尓〉（万一五・三五八八）

③あらたまの年の緒長く逢はざれど異しき心を〈家之伎己許呂乎〉我が思はなくに〈安我毛波奈久尓〉（万一五・三七七五）

これら①～③は類歌の関係にあるが、三首とも第三句に逆接確定条件句を構成する接続助詞ド・ドモが来ており、第四句と第五句はいずれの歌も、ケシキココロヲアガモハナクニで完全に一致している。そうすると問題の二三九九番歌は、第三句に「寝たれども」と逆接のドモがあるところから、下の句も①～③と同様であると推考して、ケシキココロヲアガモハナクニと訓むのが穏当ではないか。

確かに、〈心異〉表記ではケシキココロヲとは訓じることができないので、本来は〈異心〉表記であったと考えたい。なぜなら古写本間で、〈ＡＢ〉表記が〈ＢＡ〉表記に文字転倒している例は決して少なくないからである。通常、『万葉集』は全巻揃った西本願寺本を底本にして、それを他の古写本と比較し、決定本文を作成する。その際、西本願寺本の〈ＡＢ〉を別の古写本を参考にして、〈ＢＡ〉に改めた場合がある。それを新編日本古典文学全集本の「校訂付記」を参照し、ピックアップして列挙しよう。

西本願寺本〈御執梓能〉→元暦校本赭〈御執能梓〉（万一・三）
西本願寺本〈弥高良思珠〉→元暦校本〈弥高思良珠〉（万一・三六）
西本願寺本〈道引麻志遠〉→広瀬本〈道引麻遠志〉（万五・八九四）
西本願寺本〈尓師弖〉→元暦校本〈尓弖師〉（万六・九七七）
西本願寺本〈妹所等〉→元暦校本〈妹等所〉（万七・一一二一）
西本願寺本〈見遣将〉→元暦校本〈見将遣〉（万一〇・一八九七）
西本願寺本〈梶之声〉→藍紙本〈梶声之〉（万一〇・二〇七二）
西本願寺本〈吹毎〉→元暦校本〈毎吹〉（万一〇・二〇九六）
西本願寺本〈舌百鳥〉→類聚古集〈百舌鳥〉（万一〇・二一六七）
西本願寺本〈将手枕〉→元暦校本〈手将枕〉（万一〇・二二七七）
西本願寺本〈音尓耳〉→嘉暦伝承本〈音耳尓〉（万一一・二六五八）
西本願寺本〈無時〉→元暦校本〈時無〉（万一二・三〇八八）

Hosei University Repository

西本願寺本〈有将等〉↓元暦校本〈有等将〉（万一三・三三三九）
西本願寺本〈跡立而居〉↓元暦校本〈跡而立居〉（万一三・三三四四）

こうした古写本間の文字転倒の表記例を見れば、文字転倒のケースは様々だが、〈異心〉から〈心異〉に書き誤る可能性はあり得るだろう。しかしながら問題の歌の場合は、古写本間で一致して〈心異〉であり、〈異心〉と書かれたものは存在しない。けれども、三二八〇番歌では、古写本間で一致している〈立留待〉を〈立待留〉の転倒であると諸注が認めている。ちなみに、新大系本は脚注で次のごとく説明する。

第九句、諸本の原文は「立留待」とあるが、「立待留」の文字の転倒とする『新考』の説に依って「立ち待てる」と訓む。次の「或る本の歌」の該当箇所には「立待尓」とある。

こうした例から、問題の〈心異〉も〈異心〉に改め、ケシキココロヲと訓むことにする。〈異心〉をケシキココロヲと訓むのは、先に示した②のケシキココロヲ〈異情乎〉が証左となる。

そうなると、結句の〈我不念〉もワガオモハナクニではなく、類歌の①～③の仮名書き例に合わせて、アガモハナクニと訓むべきであろう。

次に、近年の多くの注釈書が支持するココロヲケニハの訓が成り立つか、検討を加えたい。

ケニ（異）は形容動詞「異なり」の連用形が副詞化したものである。『時代別国語大辞典・上代編』（三省堂）に、「程度が次第に強まっていく意を添える程度副詞として用いられる」という解説があるとおり、「特に・より一層まさって・いよいよ」の語釈で、万葉歌のすべての例を統一的に解釈できる。

とりわけ、「日に異に」という表現が一六例と多く、慣用句として、「日を追ってますます」の意で、次のように用いられている。

春日野に朝居る雲のしくしくに我は恋ひまさる月に日に異に〈異二〉（万四・六九八）
秋風は日に異に〈家尓〉吹きぬ我妹子は何時とか我を斎ひ待つらむ（万一五・三六五九）

また、「いや日異に」も四例見られるが、「日増しにますます」の意で全例を解せる。

……いや日異に〈異〉栄ゆる時に……（万三・四七五）
明日香川水行き増さりいや日異に〈異〉恋の増さらばありかつましじ（万一一・二七〇二）

これら以外のケニ（異）には次のような例があるが、いずれも「より一層・格段に」の意で解釈することが可能である。

里ゆ異に〈異〉霜は置くらし高松の野山司の色づく見れば（万一〇・二二〇三）

Hosei University Repository

秋と言へば心そ痛きうたて異に〈家尓〉花になそへて見まく欲りかも（万二〇・四三〇七）

そうすると、問題の歌をココロヲケニハと訓んだ場合、意味は「心をより一層」となるはずであるから、諸注が現代語訳する「浮気心」の意にはなり得ないだろう。

新編全集本が二三九九番歌の頭注で、「この異ニは相手に対して実意がないことをいう」と、わざわざ説明しているのは、万葉歌に見られる他のケニ（異）の語義に照らして、明らかに異例であるからであろう。

要するに、ココロヲケニハだけが、万葉歌に例を見ない副詞的な用法からはずれた特殊な表現になってしまうのである。

さらに万葉歌では、「我が思はなくに（私は思っていないのに）」の句は必ず結句に現れるが、その前を見ると、「……心（を）」となっている例が目立つ。

山背の泉の小菅なみなみに妹が心を我が思はなくに（万一一・二四七一）

うちひさす宮にはあれど月草のうつろふ心我が思はなくに（万一二・三〇五八）

丹波道の大江の山のさね葛絶えむの心我が思はなくに（万一二・三〇七一）

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに（万一六・三八〇七）

佐保川に凍り渡れる薄ら氷の薄き心を我が思はなくに（万二〇・四四七八）

このうち、「浅き心を我が思はなくに」と「薄き心を我が思はなくに」は、〈形容詞連体形＋心を＋我が思はなくに〉であるから、問題の歌を「異しき心を我が思はなくに」と訓じれば、これと類型表現になる。

それでは、改めて類歌四首を並べてみよう。

◎あからひく肌も触れずて寝たれども異しき心を〈心異→異心〉我が思はなくに〈我不念〉（万一一・二三九九）

①韓衣裾のうちかへ逢はねども異しき心を〈家思吉己許呂乎〉我が思はなくに〈安我毛波奈久尓〉

或る本の歌に曰く、「韓衣裾のうちかひ逢はなへば寝なへのからに言痛かりつも」といふ。（万一四・三四八二）

②はろはろに思ほゆるかも然れども異しき心を〈異情乎〉我が思はなくに〈安我毛波奈久尓〉（万一五・三五八八）

③あらたまの年の緒を長く逢はざれど異しき心を〈家之伎己許呂乎〉我が思はなくに〈安我毛波奈久尓〉（万一五・三七七五）

これら四首は上の句で、◎「ほんのりと赤い肌に触れぬまま寝ましたけれども」、①「韓衣の裾が合わないように逢わないでいるけれども」、②「遥かに遠く思われることよ。それでも」、③は「長い年月逢っていないが」と、いずれも逆接確定条件句を用いて「一人でいるけれども」

Hosei University Repository

と歌う。そして下の句は、共通のケシキココロヲアガモハナクニ（私は浮気心を抱いていませんよ）になっている。

また、①と③は第三句に「逢ふ」を使うが、◎は第三句に①の或る本の歌の第四句に見える「寝」を用いている。しかし、その内容は、◎が「ほんのりと赤い肌に触れないまま寝ましたが、私は浮気心を抱いていませんよ」に対して、①の或る本のほうは「韓衣の裾が合わないように逢わないので寝てもいない。それなのに噂がひどいことよ」で異なる。つまり、共寝をしていない点で両歌は同じであるが、◎は浮気心を否定し、①の或る本の歌は人々の噂がしきりであると歌う点で相違する。

以上、◎の下の句は①～③に倣って、ケシキココロヲアガモハナクニと訓み、類歌に加えるべきであろう。

おわりに

ここではこれまで類歌であるとは認定されずにいた歌が、その訓み方を変えることで、類歌になるという新たな提案を行った。二組あるので整理し、改めて示そう。

◎梅の花枝にか散ると見るまでに風にまがひて〈風尓乱而〉雪そ降り来る（万八・一六四七）

妹が家に雪かも降ると見るまでにここだもまがふ〈麻我不〉梅の花かも（万五・八四四）

◎の第四句は、諸注で「風に乱れて」と訓じられていたため、類歌であるとの指摘はされなかった。しかし、ここは万葉歌におけるマガフの用法等から「風にまがひて」と訓むべきで、そうすると両歌は明らかに類歌であると認められる。

◎あからひく肌も触れずて寝たれども異しき心を〈心異→異心〉我が思はなくに〈我不念〉（万一一・二三九九）

韓衣裾のうちかへ逢はねども異しき心を〈家思吉已許呂乎〉我が思はなくに〈安我毛波奈久尓〉（万一四・三四八二）

はろはろに思ほゆるかも然れども異しき心を〈異情乎〉我が思はなくに〈安我毛波奈久尓〉（万一五・三五八八）

あらたまの年の緒長く逢はざれど異しき心を〈家之伎已許呂乎〉我が思はなくに〈安我毛波奈久尓〉（万一五・三七七五）

◎の第四句については、「心を異しく」や「心を異には」の訓を採用する注釈書が多い。しかし、ここは右の三首に倣って「異しき心を」と訓み、「不実な心を」の意で解するのが、文字転倒を想定するものの、第四句から第五句へのつながりがスムーズであり、他の説に比べて無理が少ない。

本稿では、従来の訓を改めることで、新たな類歌の関係が成立する歌を二首取り上げた。今後も引き続き、類歌という視点から考究を重ねていきたい。